



Title	森塚教授のご退官にあたって
Author(s)	林, 栄一
Citation	大阪外大英米研究. 1985, 14, p. 1-5
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/99077
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

森塚教授のご退官にあたって

林 栄 一

森塚教授がいよいよ定年によって退官されることになった。これはもちろん以前からわかっていることであり、またこの期に及んでいくらお引きとめしたいと思っても、どうにもならない相談であることは、重々承知しているのであるけれども、いざそれが現実の事態となると、いいようのない寂寥感が身の内一杯に拡がるのを禁じえない。この気持は同僚の諸氏も同じであろうが、特に私の場合は、森塚さんとは永年のおつきあいであっただけに、この感是非常に深い。しかし、これは感傷である。従って、まず先生がご健勝で定年を迎えられたことを、これまでのご功績に対して敬意と感謝の意をこめて、衷心からお祝いさせて頂かねばならない。本当に長い間ご苦労様であった。先生もさだめしホッとされていることであろう。アルス・ロンガ・ウィータ・ブレウイスというけれども、個人にとっては満65年を迎える時間は決して短くはない。その間にはいろいろなことがあった筈である。特に第二次世界大戦を直接体験したわれわれ世代の者にとっては、人生の上り坂で生命の危険にさらされながら生きのびてきた事情もあって、過ぎにし時代を回顧するとき、名状しがたい感慨をおぼえるのである。

公式の記録によれば、先生は昭和19年9月兵役のため半年繰り上げて広島文理大英文学科を卒業、直ちに応召で海軍に入隊、20年敗戦により復員され、翌年から正式に教育者としてのスタートをきられた。昭和24年から神戸経専から現在の神戸商大に勤務されることになったが、26年から27年にかけてアメリカに留学、ミシガン大学でマスターの学位を得て帰国された。爾来同大学で教育研究の成果を積み重ねられていたところ、44年本学に大学院が設置されるにあたって、英語学科のスタッフとして赴任されることを慫慂し今日に至ったのである。その間52年から54年まで附属図書館長の重責を担われたことも特記され

ねばならない。また57年からは英語学科の主任としてご苦勞をおかけしてきている。

以上は表面に記された先生のご経歴であるが、以下私事にわたって恐縮であるけれども、お許しを頂いて、私と先生との個人的なふれあいについて若干述べてみたい。まず森塚さんと最初にお知りあいになったのは、31年頃、今は故人となられた大塚高信先生が主宰された「大阪英語学談話会」のメンバーとして会の成立にあずかったときである。実は私としては、神戸商大に非常勤講師として出ていた頃に、森塚さんのお名前は聞いていたのであったが、直接にご面晤する機会はなかったところ、大塚先生宅で月に一度研究会をもつようになって始めてそのメンバーとして親しくおつきあいをするようになった。序でながらそのメンバーには荒木一雄、小西友七、日下部徳次、松田裕、中条和夫、三井高敬、北山顕正、林哲郎などの諸氏がおられ、当時はいずれも新進気鋭の学徒として、例会ではなごやかな雰囲気の中ながら、厳しい切磋琢磨の議論が展開されたことをなつかしく思います。森塚さんは得意とされる数理的立場から鋭い英語の解析を呈示され、数痴の私などはただ感歎するばかりであった。例会は大塚先生のお宅で行なわれることが通例であったが、時には懇親会を兼ねて、席を設けて名所旧跡に場所を求めることもあった。森塚さんの肝煎りで、神戸商大の海の家を一泊で利用させてもらったこともある。楽しい集いであった。

例会での発表は貴重なものが多かったので、そのまま消えてしまうのは残念ということから、大塚先生のお世話で篠崎書林から『英語学』という年刊の雑誌を出すことになり、各自がまとめたものを寄稿することにした。この雑誌は、第3巻まで出したのであるが、そのうちにメンバーの諸氏も年を加え、それぞれ奉職する学校で役職につかざるをえないような事態が相つぎ、また学会その他で地位が確立するにつれて多忙を極めるようになったことから、例会での集まりも意に任せぬことになってきたので、この談話会も一応それなりの役割を果たしたということで解散することになったのである。私の記録によると、第一回の会合が昭和31年5月12日(土)で、解散の集いをもったのが、昭和42年8月

21日(月)であるから、ざっと12年間続いたことになる。思えば息の長い研究会であった。なお、この最後の会合を設けた席は、箕面の滝道に添う「琴の家」という料亭であったのは、森塚さんと私にとっては奇しき縁であったかもしれない。とに角森塚さんは、その時はまさかその後2年足らずで本学に赴任、そしてゆかりの箕面の地で定年を迎えることになるろうとは、神ならぬ身のつゆ知るよしもなかった筈である。

ところで、上に述べた大阪英語学談話会は、会そのものの仕事ではなかったが、大塚先生の采配で、その構成員の多くが参加して、幾つかの著作を世に送ったことも記しておかねばならない。個人単位では、たとえば、研究社の『英語学ライブラリー』に顔を出すような仕事もあったが、辞典類はもちろん共同執筆であった。『新英文法辞典』(昭和34年、三省堂)、『英語慣用法辞典』(昭和36年、三省堂)、『英語表現辞典』(昭和44年、研究社)などがそれであって、森塚さんも私も、随分と尻を叩かれて原稿を書いたものである。それから、もう一つ忘れられないのは、研究社から出した *New Age* と称する高校の検定教科書(昭和43年、研究社)を、森塚さんとも一緒になって、手がけたことである。教科書を作るという仕事が、どれ程の手間ひまをかけねばならぬかということを、この時始めて、いやになる程身にしみて思いしらされた。特にこの教科書は各頁で記述が完結する様式を文法・作文では採用したため、行数数字の制限のため泣かされたし、読本の場合もビースの採択に龐大な資料からピックアップする仕事はとてつもない努力を必要とした。森塚さんはこの読本の材料さがしの作業にあたったため、連日タイプライターを一台駄目にしてしまう程、次から次へと英文を打ち続けられた。そして編集会議でボツにされると、また別の材料を探すのであるが、私はこのときの森塚さんのエネルギーにはほとほと感服した。山なすタイプ原稿を見るだけでも、大ていへこたれるのに、森塚さんは嫌な顔一つせず、次回の会合のため資料の山へ宝探しに立向い、うむことがなかった。本当に大変な仕事であったが、お蔭で *New Age* という教科書の初版が完成したのである。

大阪英語学談話会での森塚さんとの関係は以上のようなことであったが、44

年に本学に来て頂くことになったので、今度は同じ職場における同僚としてのおつき合いに切替ったのである。その事情を述べると、本学に大学院が設置されたのは昭和44年の4月であるが、これは外国語学研究科であって、英語学科としては文学や文化をも包含するが、主な柱が英語学にならざるをえないところ、羽田三郎氏が青山学院に転出されることになって、その後任となるべき英語学担当の教授を至急補充しなければ発足できないということが生じたので、白羽の矢が森塚さんに向けられたのである。実は森塚さんが勤務されている神戸商大は県立であるから、給与その他も国立へ移る場合は不利な扱いになるということもあって、果してこちらの希望を叶えて頂けるか心配したのであったが、ご快諾が得られてホッとした。森塚さんにしても、新しい職場に移られるについては、いろいろと考えられたと拝察するが、一旦決断されるや、本学の校風や伝統に溶けてむよう非常な努力をなされた。その温厚で誠実なお人柄で、当時は片山忠雄先生が主任であったが、英語学科全体の雰囲気、極めて自然に這入りこまれた。先生自身も格別な違和感をお持ちになったことはなく、学科全体は和気霽々として教学の実をあげてきた次第である。

先生は特に教育者として一番大切な学生に対する思いやりに富んだ方で、私などがともすれば面倒がるような世話を、むしろ進んで買って出るところがあって、学生の信頼と敬慕を集めておられた。たとえば、文部省の留学制度によるアメリカのウィスコンシン大学への派遣など、うるさい手続を一向苦になさらないで、ただ学生のためという純粋な心でやって頂いた。また本学に赴任されて間もなく、学園紛争の嵐が本学にも例外でなく吹き荒れたのであったが、そのときも一般学生のため、その解決の努力を惜しまれなかった。図書館長は52年から2ケ年間勤められ、これはこれで随分とご苦労をなめられた。何であれ、今の時代では「長」と名のつく現場の管理職は上と下との板挟みにあって辛いことの連続である。本当に「しんどい」ことであったが、それを持ち前の芯の強さで乗り切られたわけである。最後になって、またぞろ厄介な仕事は先生を待っていたのはお気の毒なことであった。それは私がとうとう首根っ子を押えつけられて、やむなく学長にされたとばかりで、英語学科の主任

のお鉢が廻ってきたことである。やってみないとわからないであろうが、相当に厄介な仕事がある。「能者はよく労す」というが、これも仕方がないことで、森塚さんも覚悟のほぞを決めて面倒な仕事をよくやって下さった。

森塚さんは面倒で厄介な仕事をむしろ進んでやられる積極性があり、うまくことが運ばないときも、それをくよくよ思いわずらうところがない。天性の楽道家なのか、いつもほがらかで明るい。人それぞれの性格があるが、森塚さんの場合それが陽性であるのはすばらしいことだと思う。森塚さんと私とは同年配であるせいもあって、共通した話題も多く、本当に親しくつきあって頂いた。学校での縁はこれで切れるが、人間としてのおつきあいが今後も続く。幸い森塚さんは健康に恵まれ、つやつやした童顔をみると、これからもお元気で長寿であられることは疑いがない。どうぞご自愛あって、学校にも機会あるごとに顔を見せて下さって、後輩をご鞭撻ご指導頂きたい。

(おわり)